

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

2024年8月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 農学研究科 応用生命科学専攻

職名・学年 博士後期課程4年

氏名 山本千莉

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	2024年度リグニン・ゴードン研究会議及びゴードン研究セミナー			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(			
発表題目	Lignocellulose Molecular Assembly and Deconstruction Properties of Rice Transgenic and Mutant Lines with Altered Lignin and Ferulate Structure			
開催場所	米国・マサチューセッツ州・イーストン・ストーンヒルカレッジ			
渡航期間	2024年7月11日 ～ 2024年7月23日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	274,070円		
	返納すべき助成金額	75,930円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		航空運賃	274,070	
		宿泊費		
		滞在費		
学会参加費				
その他				
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)この度は、国際学会への参加に対して多大なるご支援をいただき誠にありがとうございました。採択後、迅速に助成金をいただいたため、非常に助かりました。本ご支援をいただいたことで、金銭面での負担及び不安なしに、研究発表にしっかりと集中して取り組むことができました。また、報告者は本渡航について、「2024年度大学院教育支援機構(DoGS)海外渡航助成金」及び「日本植物バイオテクノロジー学会・JSPB国際会議参加奨励金」からもご支援いただきました。そのため、これら助成金と合わせて本渡航経費を計算、二重払いにならないよう十分に注意した上で、使用及び会計報告させていただきました。			

## 成果の概要/山本 千莉

米国マサチューセッツ州イーストンにあるストーンヒル大学を訪問し、2024年7月13日から19日にかけて開催されたリグニン・ゴードン研究会議（GRC）および若手研究者向けサテライト会議であるリグニン・ゴードン研究セミナー（GRS）に参加しました。これらの会議では、研究発表に加え、キャリア形成を支援する多様な交流イベントにも積極的に参加しました。

今回参加したリグニン GRC は、歴史と権威あるゴードン研究会議の一つであり、植物細胞壁の主要成分であるリグニンを研究対象としています。様々な専門領域で活躍する世界各国の著名なリグニン研究者が集まり、約1週間かけて、寝食をともにしながら、植物バイオマス利用拡大に向けた分野横断的の討論が行われました。また、GRCでは、若手研究者育成と多様性促進を目的とした「Power Hour」と呼ばれるセミナーも開催されました。一方、GRSは、若手研究者の育成を主眼とした会議であり、研究発表を通じた活発な議論に加え、メンターとの交流会やキャリア開発に関するセミナー（Mentoring Lectures）などが企画されました。私は、GRCにおいて1件のポスター発表を行い、GRSにおいては1件の招待口頭発表と1件のポスター発表を行いました。

### GRCでの研究発表について

リグニン GRC では、世界中の植物バイオマス研究のトップ研究者による最新の研究発表と活発な議論が行われました。私もポスター発表を行い、約1週間の会議中、2日間ポスターを掲示することで、多くの参加者と交流する機会を得ました。博士課程やポスドク研究員だけでなく、多くの先生方からも活発な質問を受け、研究内容について深く議論することができました。世界のトップ研究者から直接フィードバックを受け、自身の研究の課題を明確にする良い機会となりました。

GRCでの口頭発表では、招待講演されている先生方の熱意やプレゼンテーション能力、発表内容に圧倒されつつも、世界の研究動向を把握し、当該分野の最新の知見の収集することを目指して、積極的に参加及び質問するよう努めました。専門分野の違う発表についても、積極的に質問することで、新たな知見や視点を得ることができました。特に、セッション間に設けられていたコーヒーズブレイクやポスターセッションの時間には、様々な分野の研究者と交流し、自身のポスター発表にも興味を持ってもらうことができました。他の分野での GRC と同様に、今回参加した GRC も長期間にわたって多くの研究者の方々と同じ宿泊施設に泊まり、同じ食堂で毎食をともにする「合宿形式」であったため、口頭発表やポスターセッションに限らず、食事や休憩時間にも多くの研究者と交流することができました。これらの交流を通して、研究に関する深い議論だけでなく、異分野の研究者とのつながりを築くこともできました。

### GRSでの研究発表について

若手研究者育成を主眼とするサテライト会議である GRS では、10分の口頭発表と5分の質疑応答の時間があり、私は自身の研究成果を発表しました。英語での研究プレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力の向上を目指して、渡航までの期間でスライドの作成及び発表練習を重ね、さらに、飛行機やバスでの移動時間や待ち時間中も練習を繰り返して当日の発表に臨みました。今回が初めての国際学会での口頭発表ではありましたが、大きなミスもなく、ほぼ練習通りに発表することができました。質疑応答では、GRSの主な参加者である大学院生やポスドク研究員から活発な質問を受け、有意義な議論を行うことができました。特に、招待講演者やオーガナイザーの先生方からのより専門的な質問は、私の研究に対する理解を深める上で大きな刺激となりました。発表後も、多くの参加者から関心を寄せられ、ポスターセッションではさらに深い議論を行うことができました。GRSでの口頭発表及びポスター発表全体を通して、世界で研究に取り組んでいる同世代の若手研究者と積極的に交流し、独自のネットワークを作ることができました。

さらに、予想外の出来事として、2年後の GRS オーガナイザーに選出されました。GRSの最終日に行われたオーガナイザー選考では、イタリア・ヴェネツィア大学の Nicolò 博士とペアを組み、2分間のプレゼンテーションを行いました。参加者投票の結果、私たちが選出され、大変光栄に思います。今後は、GRCのオーガナイザーの先生方と連携を取りつつ、GRSでの発表者や招待講演者の決

定、プログラム作成など、会議運営の全般に関わっていく予定です。私にとって非常に大きな挑戦ですが、今回の GRS で得た経験を活かし、若手研究者の成長やキャリア形成にとって重要な会議となるよう、精一杯取り組みたいと考えています。

### その他のイベント及びセミナーについて

本会議では、GRC および GRS とともに、研究発表に加え、キャリア形成を支援するための様々なイベントや、若手研究者育成とダイバーシティ促進のためのセミナーが企画されていました。これらの機会を積極的に活用し、世界の研究者から研究生活における様々な経験談や悩み、そして成功談を聞くことができ、深く感銘を受けました。特に、今後の研究者としてのキャリアを考える上で、自分自身に不足している点や新たな視点を得ることができ、非常に勉強になりました。また、世界のポスドク研究員や先生方からも、セミナーやイベント以外でもキャリアに関する貴重なアドバイスを多数いただきました。これらの経験を通じて、自身のキャリア形成についてより真剣に考えるきっかけとなり、今後の研究活動に活かしていきたいと考えています。



会場となったストーンヒル大学の様子。



食事の様子。毎食色んな研究者と研究の話やフリートークを楽しみました。

世界のトップ研究者が集う GRC 及び GRS での研究発表と、同世代の若手研究者を含む海外研究者との交流は、今後の研究者としてのキャリア形成に大きな影響を与えました。今後も継続的に国際会議に参加し、英語力を向上させるとともに、今回の渡航で得られた多くの知見を活かして、博士論文の完成度を高めていきたいと考えています。博士号取得後は、海外でポスドク研究員として経験を詰むこと目標としており、今回の渡航で築いたネットワークを最大限に活用し、受け入れ研究室の選定や共同研究等、自身の研究の推進に努めます。また、2年後の GRS では、オーガナイザーとして、参加者全員が活発に交流し、有意義な時間を過ごせるような会になるよう熱心に準備を進めていきたいです。

### 謝辞

この度、海外渡航をサポートしてくださった京都大学教育研究振興財団の皆様に変更御礼申し上げます。貴財団によるご支援をいただけたことで、今回このような貴重で有意義な時間を過ごすことができました。今回の渡航での経験を活かして、今後も精一杯研究活動を続けていきたいと考えております。